東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

心理概念の「持続性」に関する言語ゲーム論：—錯覚と透視イメージの脱構築—

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-03-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 久部, 和彦, Hisabe, Kazuhiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1396

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

心理概念の「持続性」に関する言語ゲーム論

―錯覚と透視イメージの脱構築―

久　部　和　彦

東京音楽大学研究紀要　第44集　－2020－

心理概念の「持続性」に関する言語ゲーム論
― 錯覚と透視イメージの脱構築―

久 部 和 彦

はじめに

途切れのない「本物の持続（Genuine Duration）」ではなく「認識の一貫性の表明」としての持続概念の使用が、本当は「断続」を内包した「表現法上の持続」であることにヴィトゲンシュタインは気付いていた。『Zettel（断片）』[1] では、「本物の持続」という概念の使用や揺れ幅が論じられている。そこでは、「意図」は途切れのない心的継続を有するというある種の「錯覚」について例示し、敢えてそれを利用した「言語ゲーム」が成り立つ土壌や、「幅の効能」を示唆する鋭い指摘がある。ところで、日常言語の話者にとっては、この錯覚という認識は「使用の前後を通して」顕在的ではなく、言語を反省的次元で分析的に論じる「研究者」にのみこの錯覚は根付く傾向がある。一般の言語ユーザーの間では「あたかも随伴過程（プロセスの生起）」があるとの「指示機能」の意識や「テキスト文字記号との突合せ」としての「事態とのリンク」は無いに等しい。目で見える動作の「持続」を基本的疎通のイメージとして習得した子供が、目に見えない「持続」があると「言う」ように「後から」なるのである。動作の開始と終了を「見ている」という「持続」と、前に思い描いた心像を呼び起こす「気持ちの連結」による「思い起こし」との間には、記号的には同じ文字と音の「持続」でも、その使用の結実には「違い」があることが（意識なく）介在している。本稿では、「持続」という「表現」が「心的出来事の随伴過程」を「指し示している（reference）」と捉える「対応説」の図式自体を問題視することにより、指示機能を織り込む枠組みの「想定」や「教育的提供」が脱構築されうることを示す。

1 『Zettel』（邦訳名は『断片』）はヴィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）が書き残した考察をファイリングしていたもので、P・ギーチ(Peter Geach)が再構成し、アンスコム（G.E.M. Anscombe）とウリクト（G.H. von Wright）が編集したものである。1967年に英語訳の初版が出されたが、本稿では1981年の第2版を用いている。初版の不正確さや理解不足等をハイッキ・ナイマンの助力も得て、入念に改めた形で出された第2版こそが、現在もスタンダードな『Zettel』の定番である。このことはイギリスの多くのヴィトゲンシュタイン研究者の間ではほぼ通説となっている。今回私は、20数年前と同様に、特にリマーク番号44から20を中心に論じているが、そこでの英訳の語句は、非常に適確で、これ以上ないというレベルにまで考え抜かれたものであると思う。よく誤解されるが、英語訳は編集者共訳ではなく、アンスコム1人が担当しており、編集の段階でウリクトも加わっているが、訳出したのはあくまでもアンスコムである。1994年の秋に、私が永住権をイギリス政府に申請する際、申請担当の弁護士から「研究上の推挙を研究領域の専門家に貰うように」求められ、相談するために、10月6日にケンブリッジのアンスコムの自宅を訪ねた。その際、アンスコム本人から、「それで正確だ」と直接確かめて聞いている。

<I>

『Zettel（断片）』のリマーク番号44～50においては、目に見えない意図の持続という概念が取り扱われている。ヴィトゲンシュタインが指摘したかったこととは、我々の日常言語であれ、研究者の反省的次元という「篩いにかけられた言語」であれ、「持続」という言い方（表現）は、まさしく括弧付き（「　」）の「持続」という「表現法のレトリック」であり、ストップウォッチで計測できるような「本物の持続」ではなく、あたかも途切れなく連続しているかのように装われた「イメージ（観念）」を「持続」という言い方を用いて代理させている場合がほとんどではないのか、という問い掛けであると思われる。『Zettel（断片）』のリマーク番号≪45≫でヴィトゲンシュタインは、「意図（意向）は、情緒でも、気分でも、また、感覚や、表象（心象）でもない。それは意識状態ではない。意図には本物の持続（Genuine Duration）がない」と明確に述べている。

1988年の10月から1990年の3月までの間に、ヴィトゲンシュタインの高弟であるノーマン・マルコム[2]は何度かこの『Zettel（断片）』のリマーク番号44～50についてそのゼミ形式の討論や輪読の場でこの箇所に関する「持続」について説明した。マルコムによると、ここでの「持続」という表現がカバーする外延と内包の微妙さへの着目は、マインドの哲学と言語哲学の領域で常に話題になる「心理概念」の多くについて、ヴィトゲンシュタインらしい一流の鋭い例示対比力を展開する上で、大変わかりやすい事例ではないかというのである。つまり、「目には見えないが、ある、有している、継続している」と我々が「言う」ときの「持続性」とは何か、という問いへの考察においては、「心理的存在の継続進行というイメージ」や、「動的進行とのアナロジーのピットフォール（落とし穴）」に容易に入り込みやすい我々の傾向性に、十分注意し、気をつけなくてはならないというのである。また、同時に、そのことに気付かせるように、配列されているリマーク群の提示により、何を言い立てたかったのかという解明も、必要であるというのである。「（計量的な）見える、時間的途切れのない、本物の持続」がないにもかかわらず、人々は、容易に、「意図を持続して有している」などと「言う」のである。『Zettel（断片）』のリマーク番号≪46≫でヴィトゲンシュタインは、このことに気付かせようとして、「私は明日出

2　マルコム作成オリジナルの『Zettel』と『Philosophical Investigations』の各リマーク番号別のテーマ分類表（小見出し表）が当時の演習参加者にのみ配布されている。また、「意識（Consciousness）」の「持続」については、1989年11月1日から数回に渡り演習内で議論があった。その内容は以下のとおりである。即ち、そもそも、計測的な時間軸の中断は諸所あっても、断続的であれ、持続という概念は、それも内包して「いる」のではないのかという議論である。「いる」のであって、「ある」のではない、との付言もあった。その意味するところは、意識の目に見えない何らかの内的な持続が「ある」のではなく、にもかかわらず、断続的であれ、そうした「具体的な何かについての意識（conscious of~/conscious that~）」は、「前と同様に有している」という「こと」が言いたい場合の「文法」であって、「ひとつの単なる文法表現（a mere grammatical expression）」なのであるという見方であった。しかし、単なる文法表現とはいっても、私的言語のような「自由勝手に」表現しうる何ものかということではなく、その表現が「納得されるだけの汎用性フレーム」が広く共有され、その意味が理解され得る「言語ゲームのフレーム（土台）」が「共同体」に行き渡って「いる」限りにおいて飛び交う文法なのである。『Zettel』のリマーク番号45番だけは1989年2月22日の演習内で『哲学探究（Philosophical Investigations）』と関連しているリマークとして引用されたことがあるが、44番から50番までの包括的な議論は1989年11月1日の演習内で「To intend & To mean」という課題とともに議論された。

発しようという意図を持っている」と言う時、「あなたはその意図を＜いつ＞もっているのか、始終もっているのか。それとも断続的にもっているのか」との書き方で、示唆的にこの問題のイメージにあるズレを指摘している。また、リマーク番号≪50≫では、「人が考えているのを邪魔することはできる―しかし意図していることを邪魔することはできるであろうか」と記述して、意図が、計測的なレングス（長さ）を持つイメージに重ねられ、心理的な「何か内的な出来事」と錯覚されないよう注意を与えているのである。

この「持続」概念の考察は、「見えない進行性」という安易な持続概念のラッピング（括り方）について、極めて抑止的であるように見えるとマルコムはいう。ヴィトゲンシュタインが取り上げている「我々の発話に出てくる多くの＜持続＞という言い方」とは、指示対象を有するような計測や形（フォルム）を有する何ものかを指し示している「事態」や「過程」ではなく、修辞的スライドを含んだ日常言語的世界像の「表現形式」であり、それをもとに使用される限りにおいての＜持続＞なのであるという指摘である。その場にいたのは私だけではなくサウサンプトン大学で教えていたガイ・ロビンソン[3]や多くの参加者が聴いていたが、『Zettel（断片）』のリマークナンバー44～50の核心について、マルコムの解説はしばしばこのような「断続性」を有する「継続の衣」が「意図の持続という表現の実態」であることを指摘する内容であったことに間違いはなく、事実、そうであったことを、今回も強調しておきたい。

そうすると、今度は、進行形（be~ing）の「持続」とは、本物の持続と、断続的な持続と、観念的な持続とに、分けて読み取ることが「意識化」されなければいけないのか、というような「語学教育者の先回りの弊害」が論じられることになったのであるが、このことについては、この頃のマルコムのゼミ出席者の間では解決せず、以降、しばらく、私は考えが整理できずに、抱えたままでいたのである。そのため、1990年８月のマルコムの死後、イギリスの国内にいたヴィトゲンシュタインの弟子たち（アンスコムやギーチ）やマルコムの惜別セレモニーにフィンランドから参加したＧ・Ｈ・フォン・ウリクト、ウィンチなどの後の世代のヴィトゲンシュタイン研究者たちにも、できる限り聞いておきたいという思いを強くしたのである。特に、ラッ

3　ガイ・ロビンソン（Guy Robinson）はイギリスの哲学者でサウサンプトン大学の哲学の専任教員でありかつ米国のボストン大学の教授なども兼任していたが、マルコムの友人でもありロンドン大学キングス・カレッジの晩年のマルコムの演習には毎回必ず参加していた。彼がいたからこそ、演習のことや参加者について責任ある記述や推薦が可能になり、挙証環境が得られたといってもよい。やはり、専門家がいなければ、証明力がないに等しく、ガイの貢献度は多大である。私がそこにいたことも、ガイが、後にアイルランドへ移り住んだ後まで、毎回、推薦や証明が要る度に、記載や記述に協力してくれたのである。また、マルコムの死後にキングス・クロス駅で、偶然ガイに出会った際には、涙を流してその死を悼んだ姿が忘れられない。ガイは、マルコムの最後を見届けた生き証人で、演習の時間外にも、ハムステッドのマルコムの家に出向き、マルコム本人や夫人のルースともよく連絡を取っていた。また、ウィンチの研究発表がRoyal Institute of Philosophyで行われた際も、マルコムとガイと私は3名で参加した。学外での様々な機会に話したことは、今となっては大変貴重なものばかりである。ブレンデルのシューベルトの演奏会のあと、「お手本であり、シューベルトの伝統の＜持続＞を見た気がする」という言い方についてマルコムが触れ、昔のヴィトゲンシュタインとの音楽論について語ってくれた。「理想は演奏家を通して持続（duration）する」との言い方について、「ほら、見たことか！ 持続は、文化的なフレームと織り合わされているのだ！」との指摘があった、と語っていた。

シュ・リース[4]の同僚であったスウォンジーにいるヴィトゲンシュタインの研究者たちとは、何としてもコンタクトを取って議論の機会を確保したいと考えるようになり、今後の研究の助言も受けることが必要であるという考え方が固まっていった。その面々には、イラム・ディルマンやH.O.ムーンス、D.Z.フィリップスとR.W.ビアーズモア、オックスフォードのP.M.S.ハッカー[5]、そして、やはりG.E.M.アンスコムとピーター・ギーチという生き残りの証人２人にもこの問題について聞いてみようと思った。

結論から言うと、ここに挙げた多くの関係者とのその後の議論は、このあとに述べる当初の私の議論と考え方の図式に対して、まずは一定の認識的転回を呼び寄せたのであるが、私を含めて、次第に、当初の介入的な教育による心理概念用法への萎縮的弊害の影響を超えて、幅のある概念のイメージの共有というものは、意外な反転的揺り戻しがごく自然に（見えざる手による脱構築を経て）呼び戻されるという結論にとどまらず、積極的な「両輪の教育」により、意識的な概念分析教育も取り込んだ上での「合有的な緩やかさの維持」が可能になるという見方に至ったのである。しかし、まずは、G.E.M.アンスコムとの討論について、結論と、そこにたどり着く考え方のプロセスに関して、重要な通過点であり転回点足りえたこともあるので、そこを詳しく考えていくことからはじめたい。

当時、アンスコムと私の間で交わした何回かの議論は、奇妙なほど完全に歩調が合いながら進み、最後の「揺り戻しの発生は自然に起こるという可能性」について、同意を共有できて終わっていたことを記しておきたい。アンスコムはすでにケンブリッジの教授職を退いていたので、トリニティー・カレッジに席（チェア）はなくニューホールのフェロー職という肩書きを一応所持していた。また、引退後でもあり、講義や指導はしていなかった。そのため、何回か教

4 ラッシュ・リース（Rush Rhees）は私が1988年10月12日にノーマン・マルコムに初めて師事してから8ヵ月半後の1989年5月22日にスウォンジーで亡くなった。アメリカ人であるがケンブリッジ時代のヴィトゲンシュタインの高弟で、アンスコムとともに遺稿管理人でもあった。フィリップス（D.Z. Philips）はスウォンジーの教授でリースの同僚である。私が博士後期課程最終年限になる1995年秋からスウォンジーに移ることについて相談した。はじめは、まず私の４万ワードのリサーチマスター学位論文を読んでから、返答するとのことであった。1994年9月後半に完成したその電話帳サイズの私の学位論文をフィリップスは読みきった。1994年11月9日付けで、「君の書いたものを、興味を持って読み終えた、いつでも、アポイントメントをして、フィリップス自身、R.W. Beardsmore、H.O. Mounce、Prof Ilham Dilman と話をするために、スウォンジーに来てよい」との手紙をフィリップスは送ってきた。フィリップスは、1995年度にはアメリカに行くので、自分が不在になるということも伝えてきた。私はフィリップスの代わりにビアーズモアに師事することにして1995年秋にスウォンジーの哲学科に移ることができたのである。

5 ハッカー（P.M.S. Hacker）を訪ねてOxfordのSt. John's Collegeを訪れたのはマルコムの死後であるが、何度か会って話をした後、月曜日夕方のゼミ（演習）にOxfordに来ないかとの提案（許可）を貰った。Hans Glock氏もいるから紹介するとの提案であった。ハッカーは、「持続」概念については、マルコムの言うとおりだとの意見のみで、独自色のあるコメントを付加することはなかったと記憶している。取ったメモも残っていない。また、ハッカーは共著でベイカー（G.P. Baker）とヴィトゲンシュタインについて多くの本を書いている。ベイカーは私のいたケント大学にかつていたことがあり、離任後も「哲学ソサエティ」に招いたことがあったが、このZettelの箇所を含めて話を聞いたことがない。私がケントにいた頃はラリー・チェースに指導を受け、コリン・ラッドフォード（Colin Radford）とも、この「持続」概念について議論した。この2名は「持続しているという意識」と「持続を確認すること」とは別のことであるという言い方で、分けて理解することを強調していた。年月がたち、その後、今度はベイカーでなく当のハッカーがケント大学の教授に就任した。

えを請いにケンブリッジまで伺うときは、いつも事前に電話か手紙を書き、決まってリッチモンド・ロード3番地にある自宅に伺った。このような背景や状況については、これまでも、何度か述べたり書いたりしているが、1回が2～3時間という対面による議論・討議をヴィトゲンシュタインの愛弟子でありかつ遺稿管理人（ヘイヤー）であるアンスコムと綿密な形で行えたことは、今思えば、かなり幸運であったと言わざるをえない。さて、アンスコム[6]との議論の内容の問題に戻ろう。「持続」概念や進行時制の用法の多くに見られる現場の「変幻自在な幅のある理解と使用」を教育的に立ち入り、それを歪め、それが消えて、「リバー・パラドクス流の言語ゲーム観による＜幅のある＞概念操作」が行き場を失った場合、代わりに、日常言語が「統制意識の色」を帯びた「窮屈な用法」を招くという事態は本当に起こるのか？ という疑問を論じる必要があるとマルコムや私は考えていたことを、アンスコムにまず伝えた。

1989年の11月頃にはこういう議論にマルコムと一旦はなったことを説明し、私はアンスコムと（その5年後の1994年秋頃に）議論をしてみたのであるが、アンスコムは結局次のような見解を述べた。即ち、仮に、進行形に敏感な誘導的指導が行われたとしても、「窮屈な教育的産物が、進行形の言語ゲームを厳密化していく」とは必ずしも限らない、こうした観点の可能性も消えない、とのことであった。「進行形の概念を細かく教育しても、言語ゲームの使用者たちが＜必ず＞窮屈になるとはおもえない」ということをアンスコムは私に繰り返し述べたのである。これは、ある種の「脱構築的な思考図」に思えた。即ち、進行形用法への教育的な意識化により「上書き」されたように見える教育付与が、実は、自然言語のコミュニケーションのゲーム内では、なぜか「長続き」せず、リバウンドを呼びおこすというある種のパラドクス、これが、顕在化する可能性が論理的に排除できないだろうということであった。あるいは、実は、回復的な幅のある用法と使用事態へ「自然に再帰する」ことが生じうるというような、ある種の「言語の自然制御力」が「ある余地」をどう否定できるのかという実在論的信念がアンスコムにはあり、ヴィトゲンシュタインもそのように考えていたはずだ、というのである。

6　1994年の10月6日に続けて、翌日の10月7日も私は連続してアンスコムを訪ねた。6日の議論のあと、終わらなかったので、「明日も来るか?」と言われたのである。正直、驚いた。泊りではなく、ロンドンからケンブリッジに、2日連続で通った。10月6日は、特に「持続（duration）」という概念を論じる箇所にある「Genuine（本物の）」という英訳について相当話し込んだ。アンスコムは、イギリスのHome Officeへ提出する私の永住権申請の推薦人を引き受け、ハンドライティングで推薦書を書きながら、「これは中身があるGenuine（本物）のライティングだから」と言ってこちらを見て笑った。Genuineという英語の意味と使用は、このような、「書きものをしたためている状態の（書く行為の自体の）持続」ということと「中身・意義・内容に本気度や真実が持続している記述（本気や本心の持続）」という合成的なニュアンスを有しているとも言ったのである。「納得か」と、ニュアンスを噛み砕いて、念押ししてくれたのであるが、重ねて「適切な英訳である」と強調していたことを付記しておく。因みに、10月7日にはレン・ライブラリーに保管してあるヴィトゲンシュタインのオリジナル草稿へのアクセスを許可するという手紙を図書館長のDavid McKitterick博士宛に書いてくれた。その際、そのままレン・ライブラリーへ今行けという。不明点があればNew HallのTutorial OfficeのDiana JonesとSt. John's CollegeのJane Healに助力を得るようメモも付けてくれたのである。MS165草稿の複写コピーは1994年12月14日付けの手紙とともに後日レン・ライブラリーのManuscript Cataloguerであるジョナサン・スミス氏から届いた。

この視点は、当時の私には、「眼から鱗が落ちる」ような絶対的な納得度をもたらした。経験に照らして、これは「そうである」と思えた。これまでの研究生活での難問パズルの幾つかを考え込んだ経験から、「分析的」になればなるほど、未解決に進み、「展望的（見渡し、比較し、よく見る）」であればあるほど、解決や納得に進む、という思いもあった。少なくとも私が議論した晩年のアンスコムはアダム・スミス流の「見えざる手（hidden hand）」と同様に、「調節のマジックは＜共同体＞に自然に埋め込まれている」という発想を述べたのは事実であった[7]。その後、どこかの草稿に、似たような記述をヴィトゲンシュタイン自身も書いていたはずだとアンスコムは述べ、『MS165』というヴィトゲンシュタインの草稿で「共同体（ゲマインシャフト）」の記述を探していた私に、『MS165』手書きオリジナル原稿へのアクセスを許可してくれた。レン・ライブラリーの遺稿管理セクションを管理する博士へ手紙を書いてくれ、その後、私の英国での永住権取得へ推薦状も書いてくれたのだが、この『MS165』資料調査を理由に英国に私が必要だという理由付けがなされた。結果として、この草稿を調べ続けたが、この草稿には「共同体」の記載はなかったと記憶している。『確実性の問題』のリマーク番号≪298≫に「共同体」の書き込みはあったのみである。また、アンスコムは夫の哲学者ピーター・ギーチを紹介し、ギーチに聞くことはないかとも促してくれたので、意見を聞いてみたところ、ギーチはアンスコムの上述の見解に違和感なく同調すると述べた。

もっとも、後に、R.W.ビアーズモアと議論してから、私は、このときの納得度やアンスコムの説への共感は多少変わったのである。ともあれ、そのときは、その先に進まねば解決しないとの思いが失せたのは不思議であったが、私にとってアンスコムは、ヴィトゲンシュタインの遺稿である『哲学探究』の英訳者であり、ヴィトゲンシュタインの遺稿管理人という巨大な存在であったので、アンスコムが生きているうちに、聞けるだけの事を聞いておきたいという気持ちで一杯であった。そのため、批判的に冷静な議論ができておらずに、鋭さに、幾分、欠けていたかもしれないと今は思う。

ドアの開閉をしてくれるアンスコムの子息から紅茶が出されときに、アンスコムは、「この紅茶は温かさが持続している」と言った場合、「持続」は「確かに＜微妙な差異＞を当て込んだ＜熱いかぬるいか＞の誤差の理解」ではなく、「まだ暖かい」という「配慮や大丈夫かOKかという意味」であるはずだと指摘した。何よりも「持続」という概念は、緩やかな「伸縮」をもつ日常の「使用法」の中に「束状に」根付いていて、進行性は修辞機能を超え、同意や確認（安心）として使用される。「汎用性」が広がると、「持続の伝達」は「共感」に不可欠であって、

7　アンスコム（Anscombe）哲学者としてはヴィトゲンシュタインの高低であったが、カトリックであったことも思い起こす必要があるかもしれない。「見えざる手」はあるの「かもしれない」と「懐疑しない」のかもしれない。夫のギーチもカトリックである。

「断続的か」「不断か」という論理には乗らない中でも機能する、というのである。議論の最中に中断は一切なく、延々と私とアンスコムは一対一で哲学の議論をしたが、紅茶の例えといい、アンスコムの頭脳は明晰で、一部の人が言うような衰えはなかった。その機転に満ちた鋭さと、論理の捌き方は、本物であった。

それでもなお、アンスコムがカトリックであったことは、あらためて記載しておく。「見えざる手」への「受け止め方」にはある種の「示唆」を感じるところがある。また、ユダヤ系の血筋が入っているとはいえ、ヴィトゲンシュタインもウィーンの出身であり、南ドイツとオーストリアはカトリックの文化圏である[8]。ヴィトゲンシュタインがマルコムに「僕はあの2人（アンスコムとギーチ）が信じているものを信じることはできない！」と語ったとされているが、カトリックの文化的な感性を「理解するセンサー」は、素養的に、分かちがたく身についていたのであり、その「引力」をも、肌身で十分知っていたのであろう。

ラリー・チェース（ケント大学）は、しばしば、「カトリック・イズ・デンジャラス！」と小声で私に囁いた。このことが何を意味するのか、ヴィトゲンシュタインを欧州の深い根からの「解放者」や「自由の側」に重ねて見ておきたい人々と、アンスコムやギーチのようなカトリック的な生活様式や信念を持ちながら英米分析哲学の研究を見ていた人々とでは、ヴィトゲンシュタインという「鏡」を通して得るものが「異なっている」のである。見えない事象や出来事についての議論において、このことはよく思い出さなければならないことかもしれないのである。

＜II＞

D.Z.フィリップスとスウォンジーの哲学者たちとの議論は少し後のことであった。1994年11月9日付けの手紙で、D.Z.フィリップスは、私の論文『Wittgenstein; Rules, Accordance and Form of Life』（9月後半完成しケント大学に審査提出した4万ワードからなるリサーチマスター学位論文）を興味深く読み終えたと言って来た。いつでもスウォンジーにきて、彼自身と彼の同僚であるR.W.ビアーズモア、H.O.ムーンス、I・ディルマンたちと議論してかまわないとの許可であった。またスウォンジー哲学ソサエティへのインビテーションも含まれていた。そのため、直後の機会に、『Zettel』の「持続」概念について、フィリップスと議論ができたのである。しかしフィリップスはカリフォルニアのクレアモントとウェールズとの行き来の問題があり、1995年から私自身がスウォンジーの博士後期課程（Ph.D.in Philosophy Candidate）にケント大学

8　ヴィトゲンシュタインが亡くなったとき、アンスコムたちは、ウィーンの伝統である「カトリック」の流儀で葬儀と埋葬を行なった。「伝統を選べるということはほとんど難しく不可能である」との本人の言葉が引用されている。ヴィトゲンシュタインは「贖罪」ということを真剣に感じる人間であったが「創造」や「造物主」という考え方には納得や共感することはなかったと言われていた。このことを聞いたときマルコムはそれを否定しなかったことは記載しておく。

から移籍した時の指導教官には、フィリップスが留守のためR.W.ビアーズモア[9]が就いたのである。そのため、この問題をフィリップスとだけではなくビアーズモアとも議論できたことは幸運であった。

この頃の、複数の議論を経た中での当時の私の主張は、おおよそ以下のとおりである。即ち、こうした進行形の用法について、ある種の教育指導的な意識化や、過度の気付きと植え付けが入り込むことになれば、その後の言語ゲームの現場（日常の言語使用）においては、幅を有した自然の調節弁をやはり失う危険性は「ある」というものである。見えざる手のような揺り戻しやリバウンドの力が届かなくなる事態に「至る」可能性も排除できないという論理的可能性や見解に再び戻ることとなったとも言えるかもしれない。また、もうひとつは、「進行形用法の意識的な細分化」が学校教育や家庭会話で敏感に「長期間に渡って」浸透した場合、これは、「持続」という概念ひとつに留まらず、多くの心理概念における進行性態様の理解においても、「断続的な移行」や「停止と進行の微妙な共存」といった「合成性」が崩れ、「言語の伸縮の自在さ」や「幅のある理解の延び」に「萎縮性」を埋め込む結末になりうるという見方であった。

後期のヴィトゲンシュタインの考え方には、指示対象のリンケージ的な画像化イメージの提起や細分化という問題を遠ざけておくべきであるという専門的で哲学的な視点が含まれているというのは通説になっている。少なくともイギリスの言語哲学界ではそうであった。指示対象の対応説（突合せ）を「理解の仕方のモデル図式」として遠ざけるのには、理由がある。それは、どう展望（Ubersehen）してみても、日常言語の言語ゲーム（使用・会話）においては、進行性の概念バンド（幅）は、断続的進行も、不断進行も、進行なき進行意識も、コンテクストに付随して実に様々であり、決して「束（ロット）」に分類できるような安易なものではないということから、説き起こされている。テキスト（文字や言葉）と事態や事象との「対応説」が巻き起こす害は、意識化されたレトリックとして括れる程度の手軽なものではないということ、および、これを分析的な哲学図式により学問の府で広められると、一般的な教育現場でも、いずれそれが浸透し、刷り込まれてしまうこと、また、そうなると、後世の一般の言語ゲームからは、「懐疑的態度」の増加や、負のマインドドライブの因子である「不確定感覚」が多発し、言葉による人の「頭の図式」への、長い意味における悪影響にまで行き着くことなど、問題が多す

9　ビアーズモア（R.W. Beardsmore）と私は1995年10月から研究をともにしていたが1997年6月13日に突如亡くなった。Ph. Dの必要登録期間は1996年9月に無事に終え、提出権を得たが、既に大学に職を得ていたこともあり、指導教官（ビアーズモア）の死去をもって私は博論や『Zettel』の幾つかのリマークに関する議論や研究を中断した。但し、スウォンジーの哲学科との付き合いは、その後も、断続的に、続いた。1998年5月28日付けでDr. I.J.H. Williamsが客員教授のオファーを送ってくれ、1998年度「文部省在外研究員」として、1999年3月26日から1999年9月25日まで、短期間イギリスへ戻ることになったのである。「Visiting Professor（客員教授）」としてのウェールズ大学スウォンジーでの半年間は、フィリップスとの再度の『Zettel』に関する議論などを中心に研究を行なった。また帰国前、1999年9月7日付で、Prof. Laurence Goldsteinが博論提出期限を2000年9月末迄延ばしてくれたことなどがあった。

ぎるというのである。

昔ストローソン[10]も、ケント大学の哲学ソサエティに招かれた際、似たような内容について語ってくれたことがあった。そして、そうした問題意識や可能性に、ヴィトゲンシュタインは気付いていたとも語った。もし、そうであれば、このような状況下において、自然な意識のもとに「使用」され続けているという多様で緩やかな多くの概念の意味付けを、言葉の教育が過度に取り上げることは、人倫的に許されるのであろうか。また、言葉の教育現場が概念の緻密さに執拗に乗り出した場合、どのような副作用が人間の言語ゲーム社会に投影されるのであろうか。

私としては、答えなきこの生の事実の中で、敢えて、意識的な教育カードとして、語学の教育現場が進行形指導の「付与（導き）」に拘り、かつ、「意識的教育項目」へと拡充的に進む場合には、目に見えない心理概念などの「幅のある妙味」に、いわばセメントで封をするような、ことになりはしまいかと危惧するのである。言語ゲーム論の脱構築の存在意義とは、哲学やパズル解きは終点ではない、という観点を、もう一度、知識人に、知らしめることにもある。人間の言語による生活形式に豊かさを与え続けることが、学問の「先に」あることを肯定的に見ようとしない学問論では、何のための学問する価値があるというのであろうか。ソクラテスが生存していれば、嘆くのではあるまいかとビアーズモアは笑顔で付け加えたことがある。その上で、概念の単色化や細分化の塗りつぶしを「教育」の名の下に行い、分析的視点を導入しすぎることが、言語の生命力を左右できる（する）のかどうか、「分かれ道の始まり」になりうる「重大な観点」かもしれないとの意見を述べたのもビアーズモアであった。ビアーズモアとの議論は、マルコムと議論した1988年の秋から1990年の春にかけての頃から数えると、更に、5年程度経過した1995年の冬頃であり、上述したアンスコムの「自然に幅のある概念理解と使用に戻る」という「揺り戻しの調節と調和の見えざる手」についても、その議論を私から聞いて知った上でビアーズモアは返答していたのである。

<III>

さて、ここで、もう一度、マルコム本人と私の議論に触れておかねばならない。マルコムとはこのことについて何度か『Zettel』を輪読する演習終了後に話をした。この演習とは当時毎週水曜日15時にキングス・カレッジで開かれていたマルコムのヴィトゲンシュタインの原典購読演習のことであり、1988年度は『哲学探究』を扱い、1989年度は『Zettel＜断片＞』を扱っていた。これまで述べてきた点に関する議論には、演習後の部分については、演習参加者の一部の者も参加しており、知られた研究者としては、サウサンプトンのアンソニー・パーマーと

10　ストローソン（P.F. Strawson）はオックスフォード（Magdalen College）の教授で『個体（Individuals）』や『日常言語の論理』などで知られる。ケント大学（University of Kent）の哲学ソサエティに招かれて、ケインズ・カレッジのコモンルームで話を聞いた。（この会合ではC. Radfordが司会を務めた。）

親しいガイ・ロビンソンも当然参加していた。私は、1988年9月からロンドンスクールオブエコノミクス（LSE）に所属しながら1989年から1990年も継続して（リテイナルとして）ロンドン大学で研究を続けていたため、キングス・カレッジでのマルコムのゼミには1988年10月から1990年の3月までのすべての回に参加していた。この間、日本人の参加者は私以外にはいなかった。マルコムの演習は全ロンドン大学の研究者・院生に開かれていたインターコレッジエイト制度の演習であり、マルコムが認めれば、キングス・カレッジ所属の者以外のロンドン大学の院生や研究者も参加できたのである。

繰り返すが、「持続」という概念や様々な進行形の意味と使用およびその教育や意識化の功罪についてのマルコムと私たち参加者との議論とは、「概念の含意する＜幅＞」についての「合意形成の世界像」を人工的に分断する意義や、介入により予想される事態についての「我々」の推察の意味についてであった。では、ここで言う「我々」とはいったい誰なのか？ これは、言語を反省的次元で分析対象にする意識的言語ユーザー（学者など）ではなく、「持続」などのコトバを使用する「日常人」のことであり、その「コミュニケーション形式」（生活形式）[11] を分け合いながら担う人々のことである。日常言語会話の様式（スタイル）や一致（アグリーメント）の行き着く先には、満足や理解後の共有感（納得度や合意）が、満たされた結果、用法として残るのである。そして、それこそが、言葉の使用が「一致」のもとに根付くということなのである。そこを、介入的に進行形や心理概念の継続や持続という言い方について、断続的な実態などを「意識させる」ような教え方をしてしまえば、これまでの無意識的なスライド（概念の刷り込みや勝手理解）による緩めの共有感に根ざした「緩やかな進行形時制のイメージ」や、＜持続＞という言葉の共同体ごとの概念像は、消え去るであろう。これが懸念されるとはいったい何を心配してのことかという考え方から議論が始まったというわけである。

緩やかな言語世界像、即ち、緩めの伸縮や各自の解釈の幅の反映が含まれながら、流れつつ緩やかに形成されていく概念理解ゲームともいうべき「幅のある共有感に根付いた言語観」（「家族的類似性」は同族の括りで理解する言語観）が消え、進行形や時制に「意識的微分」を付帯する敏感な言語ゲーム感が入り込むイメージとも言える。「家族的類似性（Family Resemblance）」という概念は『哲学探究』[12] の中にも登場するヴィトゲンシュタイン後期の重要な考え方を反映するキー概念であるが、私は、この概念は、ヘラクレイトス的なものと捉えている。つまり、流れつつ、削られつつも、形を変えながら川の流れは進行し、「変化流動しつつ変わらない」という一見矛盾するような「リバー・パラドクス」の形成過程に似た捉え方であると思

11　Wittgensteinは『Philosophical Investigations（哲学探究）』のリマーク番号23番において次のように記している。Here the term ‘language-game’ is meant to bring into prominence the fact that the speaking of language is part of an activity, or of a form of life.

12　Family Resemblances（家族的類似性）の概念についての説明はWittgensteinの『Philosophical Investigations（哲学探究）』リマーク番号67番に登場する。

う。この、束ねながら厚みをつけ、幅を持ちながら概念というものは使用されうる、という考え方には、日常言語の言語ゲームの真理があるように「見える」。伸縮し、取り込み、埋め込み、膨らみ、合体しながら辿るような、「合流・合成のバンド（幅）感のある各概念の理解という世界像」が「ある」のである。これこそが言語使用のゲームの本流に「ある」事実であり、言語ゲームを注意深く「見よ！」（考えるな！）と叫んだヴィトゲンシュタインの「展望（Ubersehen）後に到達した実在論」なのではあるまいか。この議論の後、私は特にそのように読む傾向性を有するヴィトゲンシュタイン研究者になったのである。

＜Ⅳ＞

今回、この『Zettel』の44－50の「持続」の問題を、長い年月の後に再び論じる契機になったのが、アンスコムとの議論の回想だったのであるが、教育や法令に付きまとう「厳密化」や「細分化」への無批判的な推奨感覚による「有害性」、言語的な窮屈さの持ち込み、自然の調和に手を入れてくる語学者気取りのお節介等に支配される「＜幅＞のある概念形成」の「破壊」について、心配せずとも、自然に「揺り戻される」のであれば、「持続」概念も、分析的に見たところで、早晩、窮屈すぎて、再び、緩やかな幅のある進行用法へ、自然反転するのではあるまいかと記して、この論考を閉じたくなる。

ところが、これまで述べたように、アンスコムのコメントだけでは、まだ、終わらないという考え方が、やはり、また出てきたのである。今の考え方とは以下のとおりである。即ち、「見えざる手」のような「揺り戻し」が、「ある」のではなく、共同体の自然さとしての＜緩み付き用法＞に「なる」のであり、そのためには、「破壊」を「放任したまま」では、いずれ、この＜幅ある運用＞に翳りが生じる可能性が、やはり、あると考える。緩やかな「揺り戻し付き」言語観のほうが、むしろ、人間の、言葉をとおした意識形成においては、本来的に、大切なのではないのだろうか、という信念も、経験的には増してきた。但し、このように感じたり考えたりするのは、学問的には何を包含するのか、ということについて、マルコムとその演習の参加者である我々が考え込んでしまったことは、案外「深い悩み」であったのではないのか。「言葉の緩やかな囲みのロープ」が、日常言語話者の言語使用から断裁されてしまっては「不便」になるので「自然と」幅ある概念使用状態に戻るというアンスコム説は、「教育的な介入の反復」が局所的に留まっている限りにおける正解なのではないのか。教育的に「進行形・時制・心理概念」の教育方法論が「執拗に分析的になった場合」は、やはり、川は別のものに変形するのではないのか。こうしたことは、言語の教育とは分析的になり過ぎれば恐ろしいものであること、文学を通した言語観の学習などが軽んじられているとしたら、やはりそれを大きく見直して再導入する教育態度が見直されるべきではないのかということ、それなくして、「分析的な概念教育」や「差異化を＜見える化＞が進むこと」が長期間何代にも亘り蔓延した場合には、会話やドラマの言語や文学は、核戦争被害並みの取戻しができない「無反応」に向き合うこ

とになるかもしれないのである。

振り子が戻らず、もう「揺り戻し」はできないのかもしれないという広がり方はあるところを超えると「起こりうる」。そうなった場合、言語地平の中に、異物（遺物）扱いされていく記述物が増え、「幅」は「曖昧さ」という言葉で置き換えられる。教育的態度の言語文明への長期的な視点などを、国語や英語の「教科教育者育成」の教員養成課程では、あまり学ばせないまま、進む。次第に、小中高の教育現場に「敏感すぎる分析的な概念指導」を付与する語学教師が投入されていくのである。そうすると、言語ゲームの細分化や敏感化に手を貸し、概念の幅（バンド）の緩やかさに人工的な手が入り込み、教育者の思想変革の脱構築が、新たに叫ばれない限り、そのまま、その傾向は、拡大するのではないのだろうか。こうしたことが、「見えざる手」[13]の調節を信じても、なお、起きて来る、という想定は残るのである。

繰り返すが、振り返ってよく周りを見廻すと、英語や日本語の「理解の交換（コミュニケート）」においては、話し手や受け手の印象形成の「像」と、実際に起こっている「出来事」との「間」の乖離による混同や、乖離を「利用」した修辞学的効力が、頻出する。むしろ、それらを織り込んだ言語ゲームの渦が日常には溢れている。「あいまいにしたい」のと「あいまいになっている」こととは別のことなのであるが、これにあえて言及しない緩めの意味理解を教育現場が「知りながら許している」のは、その混在に手付かずの状況であるほうが「心地がよい」という経験的事実を我々が知ってしまっているからなのではないだろうか。この「現実」は何故このように形成されていったのであろうか。このことを、問い、考察する機運のみから、上述の分析的な概念教育の功罪と蔓延の転換への歩道（パス）形成を論じられるのではないか。このような観点からこの先の議論を展開してみたいと思うのは、結局、言語ゲームの繰り返しの中でのみ心地よさの位置情報が見つかるということを人々は知っているのではないかという考え方にある。「広めの意味バンド」が浸透するという理由の源泉は、本当のところ、そこにあるのではないのだろうか。そうすると、教育現場で、概念や意味を分析的に「仕分け」する風潮が増しても、最終的には、町の中の生活言語の意味交換は「緩やかな」ままで流れていくという予想が立つ。経験知のために、言語が角張らない力学が作動する。このような考え方が終点ではないのかという気分が、いよいよ定説になるかもしれない。

13　アダム・スミス（Adam Smith）の「国富論」第4編第2章にある「The hidden hand（The invisible hand）」は、「見えざる手」と訳されているが、その例えから類推し意味するところは、「知らずに調節されていく」というようなある種の素朴実在論的な概念ではなく、「見えざる手が働き、調節が、なされる」という解明不可な調節弁の「存在」を暗示しているとも読めるのである。言語ゲームの「流れ」の中でそれぞれの見えない意味概念などは「落ち着きどころ」を自然と見出し、「収まる」のか、収まるように、「見えざる手」が「働き」、それによりコントロール「される」と理解するのかでは、大きな隔たりがあることに注意が必要である。

＜V＞

では、最後に以下のような考えはどうか。即ち、持続性の「外延」の相対化は、心理概念の「混同」と知りながら、意思疎通や芸術的な満足等に通じる何らかの「非言語寄り」の「導線」として、価値をもつのではないのかと。もし、そのような「心地よさ」や「効力」によって「心的概念の人工的な隙間」が活かされうるという意識が「着目」され、そのような説明による教育指導が導出できるのであれば、言葉の使用の「ぼかし」の逆説的な意義が「積極的に」見出されていくことになる。

細分化放棄の損失よりも、幅（バンド）の緩やかさを残した言語教育や、錯覚効果に手を貸しているといわれても、そのほうが人間と言語と感情形成の未来像に、なお、プラスが大きい、というような教育論が確立されていけば、細分化意識を啓発する語学教育への嗜好も、追及されなくなってくるのではないのであろうか。つまるところ、なお、得られる「相互理解の果実」が「芳醇に」かつ「豊潤に」あるということならば、それも人知における意思疎通の長期的基礎（土台）や効力として、有用性が認識され、既に背景知として構造化されている（脱構築されている）のかもしれないのである。

持続概念は、ストップウォッチで計るような「透視可能な持続」を有しない。ここまでは、「教育的に」細分化意識を与えてもよい。しかし、同時に、それを知らせた上でも、「意味の色合いと度合い」や「抽象的接近度の輪」の「幅の利点」をあえて利用しながら言語ゲームを営むことが「豊かな言語社会の形成に資すること」も教えるのである。つまり「両輪の教え」の実践は矛盾せず「共存的」である。当然、低学年の子供は「但し書き付き」の物言い[14]をすると混乱するというのは事実であるから、この「両輪の教え」は高学年や反省的なメタ次元思考力が育った大学生あたりまでが対象であろう。

しかし、そうすると、実際問題として、自然に、言語ゲームの世界に入る幼少期を、分析的か、幅ある緩やかな概念教育か、どちらで教育するのか。分別と経験を経た中学高学年以上や大学生には、分数的整理や理解図式に言及しても、同時に、「コミュニケートの効力」を活用する「意味定義の緩やかさの利点」を「理性的に」説けば、それなりに「教育」できるように思われる。大学生などには、表現法と出来事との間の「隙間」には、指示対象への誤謬が入り込むという弊害を知らせながらも、それを「緩めた」理解や使用感覚のほうが、「果実」は大きいと「知らせた上で納得させる」のであれば、彼らは二兎を得るであろうと思われる。

---

14 「子供は但し書きつきの物言いを理解しない」という一節はマルコムの『Wittgenstein A Memoir』にも出てきたかと思われるが、直接マルコムに聞いてみたところ、「留保、部分承認、比較」などは「あとから」身につく「考察力」であるのは、ある意味で正しいが、だからといって、子供が、この手の物言いを全く理解できていないというのではないと思う、と言ったのである。要するに、子供は、多義性の把握に「知的な」関心を示さないということが多いということから、行為傾向として「比較をジャンプしてすすむ」のが心地よいだけではないのだろうか、というコメントであった。私は驚いて聞いていたが、今思えば納得できる考察である。

では、言語の選択的理解以前の「植え込み期」の幼少期の言語ゲームの「現場」では、どうすべきであろうか。ここについては、「文学（お話）」の読み聞かせや「多読」が不可欠であり、概念の幅は狭くも広くもなる「あわせ技」を「浴びるのみ」ということがセオリーになると思われる。

ストラヴィンスキーのオーケストレーションを聴いて「マーラーと違う」と言えるのは、マーラーとストラヴィンスキーの「2つの対比の言語ゲームのみ」では起こりえないのである。そうではなく、マーラーとR・シュトラウスの違いや、シベリウスとベリオの違いなどの「多面的な反省的興味」を経た後にしか、このような「比較のゲーム運び（言い方）」は根付かないのである。つまるところ、幼少期やその道への導入時には、人の概念操作や概念の外延と内包には、但し書き付きの比較論法は届かないのではなく関心や反応が薄いということなのである。

アンスコムの言っていたことがある意味で正しかったとすれば、「比較思考モード」に乗った論理展開ができる大人には、その時間の間は「分析的な使い分けへの注力」が「優先的になる」ということであり、そうでない時間には「融合的な幅のある使用に違和感なく戻る」ので、この両方は、同一人物の大人の中でも、共存しているといえるのではないだろうか[15]。そうすると、やはり、概念の細分化を強調した教育をしても、その弊害は毒にはならずに、明晰さが増すプラス効果のみが加算されるばかりかもしれないのである。ただ、これは、まだ、予想である。

もし、教育プログラムに概念の細分化を強調する指導体制を導入する是非を問われたならば、未だに、踏み込みにはまだまだ気が引ける。この先を書くことは更に勇気が要る。何故か。それは、細分化指導をできる教員養成に不安を感じるのである。教え切れない場合の副作用についての懸念といってもよい。一度は、実験的にやってみることからしか学べないであろうとも言いたいが実験の教育という考え方は、不安定であろう。実験の言語教育を通した言語観が形成される場合には、指導者のボタンのレベルによってバラつきができるであろう。「後からの」補正はできないのである。同じ方向を向き、読み聞かせや、文学的な多読を実践してもらっても、各指導者の「細分化」教育の言葉力によって、結果は多様化する。それでも、そのあとにこそ「脱構築」と「両輪の言語観の広がり」が出現すると信じて、「緩急ある両輪の意味理解」を教育する選択肢は目前にある。進行形、心理概念、時間軸にかかわる時制の精密化、等を国語や英語の言語教育でよりクリアにできれば、世界がある意味ではよく見えるという言語教育実験が試されている。それがうまくいかなかったときには、言語で両輪を廻さず、明晰性は言語の担当で、包括的な緩やかさは芸術などの非言語媒体の担当になるということでよ

15 「振り子」のように「クリアカットな概念操作」も「ファジーな概念運用」も「両方」できるほうが心地がよいことを「知る」のは、言語ゲームの経験知を浴びて徐々に悟るのであるというのが今の私の予想である。アンスコムはこのようなことに気付いていたと思われる。

いのだろうか。「言葉」と「音楽」と「非言語の表現」の総力戦ではかえって両輪の言語教育観は「消える」のか。音声と音韻から反省的な語学教育を組み直す重点化も重要であるが、本当は、意味操作に焦点を当てた言語教育の普及のほうがより深刻な大事業なのである。「心配無用！」というアンスコムの声が聞こえてきそうである。「言語ゲームの経験知からの習熟」と「教育的な概念理解の細分化付与」は両立する、と。その場合は、概念のクリアな分析を有する教育を与えても、「緩やかな幅ある理解や使用」に混乱をもたらすことはない。もしそうならば、言語教育に携わる教員養成の中身と指導法の脱構築を経なければならないと思うことこそが「歪み」であり、既に、「脱構築」されていることに無知なだけなのかもしれないのである。

＜おわりに＞

「教育」における「言語ゲームの意識的指導」と「展望（見廻し）による習得」の両輪の活用論が、意味操作世界の豊かな意識形成を広げ、言語活動（ゲーム）の心地よい流動性や複合的還流力を想起しうる「糧」となることについて、理想像として異議を差し挟む余地はほとんどない。「意味」と「指示」の古き「対応説」の世界像やその正当化の多くの議論への解決は、長く哲学的な課題であったが、意外にも、その脱出はできていたという感が専門家の間には「あった」ことは事実である。これを一般の教育のレベルでもフォローさせて、指示機能と文字テキストのリンクによる「意味の像の理論」を蔓延させない工夫は必要である。ただ、そこは、入り口であり、もっと大きい仕事が合ったのである。それこそが「意味と概念の細分化」志向と「意味と概念の包括的運用」の志向を壊さずに両立させる言語教育体制の構築は危険ではないか否かという問題であった。音楽大学での言語教育は、「反省的な次元」の理解ができる対象者へのものであり、同時に、「非言語表現」に感覚的な喜びを見出せる経験者の集まりでもある。彼らにとっては、言語ゲーム論の言語による考察を深堀しても、非言語表現や緩やかさの領分も十分維持可能と思われる「蓄積」がある。一方、一般大学での国際教育プログラムなどについては、こうした言語教育の根底的な問題を講義する教育がなくてはならないとも思われるが、品薄状態は解消できていそうにもない。多くは、英語資格試験の攻略などが叫ばれているばかりで、そうした状況には、長期的視座から見ると、気がかりが残るばかりである。音大生は「言語」とともに「非言語」である「音」でコミュニケートする果実を知っている。この潜在力が、研究対象として、意外な発展性を有していることもあるのかもしれない。今後の課題である「言語ゲームへの参加の段階と階層論」といった研究課題を、続編としていずれ考えてみたい。

（本学講師＝外国語（英語）担当）

【参考文献】(和文)

G.E.M.アンスコム『インテンション』菅豊彦訳 1984 産業図書
L.ウィトゲンシュタイン　全集9～『断片』黒田亘・菅豊彦訳 1975大修館書店
L.ウィトゲンシュタイン　全集9～『確実性の問題』黒田亘・菅豊彦訳 1975大修館書店
L.ウィトゲンシュタイン　全集8～『哲学探究』藤本隆志訳1976大修館書店
L.ウィトゲンシュタイン　全集10～『美学講義』藤本隆志訳1977大修館書店
ウィンチ『倫理と行為』奥雅弘・松本洋之訳1987勁草書房
ギーチ『合理的思考のすすめ』西勝忠男訳 1984 法政大学出版会
クリプキ『名指しと必然性』八木沢敬、野家啓一訳 産業図書
クリプキ『ウィトゲンシュタインのパラドクス』黒崎宏訳 産業図書
W.V.O.クワイン『論理的観点から』飯田隆訳1992 勁草書房
H.ステーテン『ウィトゲンシュタインとデリダ』高橋哲哉訳 1987 産業図書
P.F.ストローソン『個体』中村秀吉訳 1978 みすず書房
L.デ・クレシェンソ『森羅万象が流転する(パンタ・レイ)ヘラクレイトス言行録』谷口伊兵衛・G.ピアッザ訳 2011日本文藝社
J.デリダ『ポジシオン』高橋允昭訳 2000青土社
J.デリダ『声と現象』林好雄訳 2005ちくま学芸文庫
J.デリダ『脱構築と正義』高橋哲哉訳 2015講談社学術文庫
J.デリダ『根源の彼方に グラマトロジーについて(上)』足立和浩訳 2012現代思想新社
C.H.ノリス『ディコンストラクション』荒木正純・富山太佳夫訳1985 勁草書房
M.ハイデッガー『ヘラクレイトス』辻村誠三・A.グッツオーニ・岡田道程訳1990 創文社
J.パスモア『哲学の小さな学校』大島保彦・高橋久一郎訳1990 青土社
N.マルコム(マルカム)『心の諸問題』石川裕子・士沼雅子訳1978 法律文化社
N.マルコム(マルカム)『何も隠されてはいない』黒崎宏訳1991 産業図書
R.ローティ『連帯と自由の哲学―二元論の幻想を超えて』冨田恭彦訳1988 岩波書店
R.ローティ『哲学の脱構築(プラグマティズムの帰結)』室井尚也訳1985 お茶の水書房

【参考文献】(英文)

Anscombe, G.E.M. *Intention* Harvard University Press 2000 (1957)
Beardsmore, R.W. *Art and Morality* Macmillan, 1971
Chandra, S. *Wittgenstein and Strawson on the Ascription of Experiences* Philosophy and Phenomenological Research Vol.41,No.3 1981 Int'l Phenomenological Society
Derrida, J. *Of Grammatology* trans. Gyatri Chakravorty Spivak.
John' s Hopkins University Press, 1977 (＊First Published in French 1967)
Derrida, J. *Writing and Difference* trans. Alan Bass. Routledge,1978

Malcolm, N. *Nothing is hidden* Basil Blackwell Oxford,1986
Mellor, D. H. (ed.). *Prospects for Pragmatism. Essays in Memory of F. P. Ramsey.*
Cambridge University Press, 1980.
Norris, C. Derrida at Yale; *"The Deconstructive Moment" in Modernist Poetics*
Philosophy and Literature IV, 1980
O'Shaughnessy, B. *The Will A Dual Aspect Theory.* Cambridge University Press, 1980
Passmore, J. *Recent Philosophers* Gerald Duckworth & Company Ltd, 1985
Philips, D.Z. *Wittgenstein and Religion* Routledge,1994
Putnam, H. *Realism and Reason* Cambridge University Press, 1983
Rhees, R. *Wittgenstein and the Possibility of Discourse* Edited by D.Z. Philips. Cambridge University Press, 1998
Sharpe, R.. *R.W. Beardsmore, 1944-1997.* The British Journal of Aesthetics, vol. 37, 4, 1997,
Said, E. "The Text as Practice and as Idea "Modern Language Notes LXXXVIII, 1973
Said, E. Beginnings: *Intention and Method* John's Hopkins University Press, 1975
Wheeler, S. *Indeterminacy of French Translation in Truth and Interpretation*: Perspectives of the Philosophy of Donald Davidson ed. Lepore Basil Blackwell Oxford, 1986
Wittgenstein, L. *Philosophical Investigations* Basil Blackwell Oxford, 1953
Wittgenstein, L. *Zettel* Basil Blackwell Oxford, 1967

＜附録＞

【資料1】執筆者略歴

氏名：久部和彦（Prof. Kazuhiko Hisabe）国籍：（日本国）、永住権：（英国）
専門領域：言語哲学・論理学・言語学・英語学・通訳論・倫理学・芸術論（美学）
所属（脱稿時）：静岡大学（教授）国際連携推進機構＜国際教育・英語プログラム開発＞（特任）
担当講義：「芸術論」（英語講義）、担当講義：「哲学」（英語講義）、
所属（脱稿時）：東京音楽大学（講師）＜MLA（ミュージック・リベラルアーツ）・外国語＞
担当講義：「英語学概論A」、「英語学概論B」、「MLA資格英語（IELTS）」、他

【資料2】外国における＜交流＞のあった研究者と専門家（一覧）

（University of Wales Swansea Visiting Professor 1999.3.26–1999.9.25. Professor K.Hisabe（自身）を含む）
Scholars/Artists.
Professor G. E. M. Anscombe.
(University of Cambridge, Trinity College Cambridge)
(New Hall Cambridge: Fellow)

(3 Richmond Road, Cambridge :Home)

Professor R.W. Beardsmore.

(University of Wales Swansea)

Supervisor & Lecturer Larry Chase

(University of Kent)

Professor P.T. Geach

(University of Leeds)

(University of Birmingham)

Professor J. Habermas

(University of Göttingen).

Professor P.M.S. Hacker

(University of Oxford, St. John's College Oxford)

(University of Kent)

Professor K. Hisabe＊

(University of Wales Swansea) Visiting Professor <1999.3.26~199.9.25>

Professor C. Howson

(University of Toronto)

(University of London, London School of Economics)

Professor Andreas Kemmerling.

(Universität Heidelberg)

Maestro Lorin V. Maazel

(Intendant fur Winner Staatsoper)

(Music Director of the Pittsburgh Symphony Orchestra)

(Chef-Dirigent Symphonie-orchester des Bayerischen Rundfunks)

(Music Director of the New York Philharmonic)

(Music Director of Munchener Philharmoniker)

Professor N.A. Malcolm.

(University of London, King's College London)

(University of Cambridge, Fitzwilliam College Cambridge)

(Cornell University)

(Princeton University)

Professor R.J. Norman

(University of Kent)

Professor D.Z. Philips

(University of Wales Swansea)

(Claremont Graduate University)
Professor K. Popper
(University of London, London School of Economics)
Professor C.J. Radford
(University of Kent)
(University of Oxford, Balliol College Oxford)
Professor R. Rhees
(University of Wales Swansea)
Professor (Dr). Guy Robinson
(University of Southampton)
(Boston University)
*1988-1990 University of London King's College London Norman Malcolm Seminar
Attended Member (Retired and living in Ireland)
Professor S.P. Sayers
(University of Kent)
Reader in Philosophy Anthony Skillen
(University of Kent)
Professor P.F. Strawson
(University of Oxford, Magdalen College Oxford)
Senior Lecturer Daniel M. Taylor
(University of Kent)
Professor J.W.N. Watkins
(University of London, London School of Economics)
Professor D. Williams
(University of Wales Swansea)
Professor P. Winch
(University of London, King's College London)
(University of Illinois at Urbana-Champaign)
Professor R. Wollheim
(University of London, University College London)
Professor Georg Henrik von Wright
succeeded Wittgenstein as Professor of Philosophy at Cambridge
(University of Cambridge, Trinity College Cambridge)
(Cornell University)
(Academy of Finland)